

市史研究よこはま 第二一号（一九九九年二月） 抜刷

戦時下「青少年学徒」の日常世界（中）

— Y校・捜真・高商出身者の証言から —

前田 一男

戦時下「青少年学徒」の日常世界（中）

——Y校・捜真・高商出身者の証言から——

前 田 一 男

はじめに——課題と方法にかかわって——

第一章 戦時下中等学校の諸相

第二章 中等学校での教科学習と課外活動

第三章 二月八日へのY校生と捜真生との対応（以上前号）

第四章 横浜工業経営専門学校における戦時教育の実際（以下今号）

第一節 横浜工業経営専門学校への組織変更

第二節 横浜工経への志望動機と入学試験

第三節 工業経営の学科課程とその学習

第四節 教師群像が語るもの

第五節 軍国主義教育の実際

第四章 横浜工業経営専門学校における戦時教育の

実際

第一節 横浜工業経営専門学校への組織変更

横浜工業経営専門学校は、戦時末期に軍事的要請によって旧来の横浜高等商業学校が強権的に再編される形で生み出された学校であった。

その過程を簡単に追ってみよう。一九四三年一〇月二二日、政府は「教育ニ関スル戦時非常措置方策」を閣議決定し、同年一二月二一日に「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ツク学校整備要領」を発表して、その具体的内容を指示した。そのうち官公立専門学校については、高等商業学校の転換及び刷新整備、理科系専門学校の整備拡充、外国語学校の刷新整備など五項目が示された。高等商業学校の転換及び刷新整備では「高等商業学校ニ付テハ一部之ヲ工業専門学校ニ転換シ其ノ他ハ生産技術ヲモ修得セル工業経営者ヲ養成スルベキ工業経営専門学校（仮称）又ハ従来ノ高等商業教育ノ内容ヲ刷新シタル経済専門学校（仮称）トス」とされた。

このような大幅な転換や刷新整備がなされるようになった理由として、満州事変以来「経済の統制強化に伴ひ我が国の経済機構に大なる変革を来し従来の商品売買を中心とする商業がその職能を変えその活動領域を狭めるに至り商業教育が国内及国際間の通商従事者養成の目的を失ふに至つ

た」ので「新体制の社会経済機構に対して如何なる職域を担当すべき人物を養成するか」の検討が改めて必要になったからだと説明された。

文部省による「商業専門教育刷新」(一九四四年一月三一日)によつて、横浜高等商業学校と長崎・名古屋の三校および東京商大附属専門部は、工業経営専門学校に転換させられ、彦根・和歌山・高岡の三高等商業は、所在地中等工業学校の施設を国に移管したうえで、工業専門学校に転換させられたのであった。他の山口・小樽・大分・徳島・高松の五校は、教育内容を刷新して経済専門学校との名称変更を指示された。三月二十九日に専門学校の呼称が一斉に改称され、ここに正式に横浜工業経営専門学校が誕生することになったのである。それまでの横浜高等商業学校に在学していた二年生と三年生とは横浜経済専門学校に編入されることになった。この時、横浜高等工業学校も横浜工業専門学校に統一的に改称している。

教育審議会の「専門学校ニ関スル要綱」(一九四〇年九月)以来、すでに一九四三年一月に専門学校令は改正されていた。この過程で大学と専門学校との役割分担を鮮明にし、前者は基礎、応用科学の研究を目的とするのに対して、後者は、戦時下の国家目的遂行に必要な各種の人材を養成する方針のもとに、官立高等商業学校も専門学校全般を統一的に再編成する、その一環に組み込まれたのであった。

さらに戦時末期においては「改革は計画性や合理性を無視したきわめて強権的な方向に、急速に動いていく」まさにその時に誕生したのが横浜工業経営専門学校であった。

『輝く白壁——横浜国立大学経済・経営学部五十年史——』(一九七五年)では、この横浜工業経営専門学校を「軍部と文部省の圧力」による「軍国主義の生んだ奇形児」あるいは「あくまでも戦争末期の“まぼろしの学校”」(二五—二頁)と捉えている。

しかし、“奇形児”や“まぼろしの学校”と呼称されることで、この学校に入学し学生生活を送った学生たちが軽視されてよいということではないだろう。ここでは、一九四四年四月に横浜工業経営専門学校に入学し、一九四七年三月に横浜経済専門学校を卒業したコーホート^⑧を対象にして、主に敗戦までの時期についての「青少年学徒」の日常生活を、横浜という舞台に重ねていくことで、ひとつの歴史像を浮かび上がらせようと試みるものである。そのことは、文部省によって強行された工業経営専門学校の成否について、学生側からの評価を確かめることにもつながっている。

この決戦下の高等商業学校の実態については、『輝く白壁——横浜国立大学経済・経営学部五十年史——』(一九七五年)においても、資料の制約から一九四三年度までの記述しかない。それ以降敗戦までの時期については、他の資

史料も極めて限られていることから、ごく一部の個人的な回想が主な記述の典拠にされている。その他の先行研究も、多くは制度政策史研究であり、その教育実態に触れてはいない。その点で、横浜工業経営専門学校入学者を対象としたこの調査研究は、その空白を幾分でも埋めることに貢献することになろう。

(35) 『近代日本教育制度史料 第七巻』(講談社) 一九五六年 二三〇—二頁。

(36) 文政研究会『文教維新の綱領』新紀元社 一九四四年四月 一四〇頁。

(37) 天野郁雄『近代日本高等教育研究』玉川大学出版部 一九八九年 三四頁。

(38) ここで、このコーホートの特徴や属性を、やや詳しくまとめておこう。同じく一九四七年三月に卒業しているものの、出生年度で言えば、一九二六年度が二七名、二五年度が一三名、二七年度が九名、二四年度が七名、二三年度が四名、二二年度が一名となっている。このうち同じく一九四七年の卒業でありながら、一九四四年以前に入學しているものが三名、戦後になって編入してきたものが四名いる。

入学者の出身府県は、神奈川県が二五名で最も多く、全体の四割を占めている。次いで東京都の二一名、静岡県³⁹の五名、埼玉県と栃木県の四名が続いている。以下、長野県の三名、千葉県と外地の二名、青森県・石川県・愛知県・香川県・愛媛県の各一名となっている。神奈川県を中心に関東地方、東海地方に出身者が多く、必ずしも全国的な広がりがみられなくなっていると言える。

出身中等学校別でみると、中学校出身者四四名(七二%)、商業学

校出身者一三名(二一%)、工業学校出身者四名(七%)となる。中学校出身者の内訳は県立・府立・市立三五名、私立八名で、商業学校出身者の内訳は県立八名、私立四名、外地一名、工業学校は四名全員が県立であった。入学者全員の出身校調査ではないので、全体の傾向を指摘するととどまるが、中学校出身者が圧倒的に多く、商業学校出身者が少なくなっている。そのなかで工業学校出身者四名が入學していることは、横浜工業経営専門学校に組織変更したことによって、入試科目も変更したことに対応しているといえよう。

兄弟姉妹の数は、四人が最も多く一七人で、次いで二人兄弟が九名、六人が八名、八人と三人がそれぞれ七名、五人が六名で、兄弟姉妹の数は概して多い。一人っ子は三名、そして七人兄弟と九人兄弟が二名ずついる。これを兄弟姉妹の出生順にすると、一番目が一九名、二番目が二一名、三番目が九名、四番目と五番目が五名で、八番目が二名であった。六番目と七番目とはいなかった。

さらに家督相続にかかわる男性の兄弟関係でみると、長男三七名、次男一一名、三男八名、四男三名、五男一名であった。なお不明も一一名いる。長男が半数以上を占めるのもひとつの特徴であろう。

なお、このアンケート調査は、一九九四年三月に実施されたものである。回収率、有効回答率については前号注(7)を参照されたい。アンケート項目の詳細は割愛した。

(39) ここで、決戦下における横浜工業経営専門学校の教育実態を明らかにすることを主な目的とする。今号では、入学試験、学科目や教師群像、軍国主義教育の実態などにまつわる思い出を扱い、次号では勤労

動員や学徒出陣について、横浜商業学校、捜真女学校の実態も含めて、論じたい。

第二節 横浜工経への志望動機と入学試験

決戦下にあつて、あえて横浜工業経営専門学校を志望した動機や理由は何だったのだろうか。その動機をまとめたのが、「表1」である。便宜的に神奈川県内中学校出身者と神奈川県外中学校出身者および実業学校出身者に区分して、志望動機をまとめてみた。

その結果は、一位に「2 周囲の人の勧め」「4 他に希望する学校の次善の選択」「5 高等商業へのあこがれ」の三つが並ぶことになった。それぞれ三割で、どれも抜きん出た高い数字ではない。指摘できることは、中学校出身者、特に県外出身者に「2 周囲の人の勧め」と「4 他に希望する学校の次善の選択」とが多く、どちらかといえば積極的な志望動機が弱いことである。ちなみに「周囲の人」に多いのは、横浜高商の先輩（七名）、父親（四名）、教師（三名）の順である。それに対して、実業学校出身者の半数以上が「5 高等商業へのあこがれ」と答えており、「9 校長（田尻常雄）の教育方針に共鳴」も含めて、積極的な志望動機が認められる。しかし実際には、高等商業は工業専門学校に組織変更されており、田尻常雄も岡野鑑記に代わっていた。にもかかわらず、受験者の側には、横浜高商のイメージがいま

〔表1〕 横浜工業経営専門学校への志望動機（MA）

	神奈川県 内中学校	神奈川県 外中学校	実業学校	総 計
1 将来の職業を強く意識して	3 (18.8%)	6 (24.0%)	4 (30.8%)	13(25.0%)
2 周囲の人の勧め	3 (18.8%)	10 (40.0%)	3 (23.1%)	16(30.8%)
3 文科学科科目が好きで学力相応	3 (18.8%)	3 (12.0%)	3 (23.1%)	9 (17.3%)
4 他に希望する学校の次善の選択	5 (31.3%)	8 (32.0%)	3 (23.1%)	16(30.8%)
5 高等商業学校へのあこがれ	2 (12.5%)	7 (28.0%)	7 (53.8%)	16(30.8%)
6 専攻したい学科があったから	2 (12.5%)	5 (20.0%)	1 (7.7%)	8 (15.4%)
7 「横浜」という地へのあこがれ	2 (12.5%)	7 (28.0%)	4 (30.8%)	13(25.0%)
8 将来の経済的安定	5 (31.3%)	6 (24.0%)	0 (0.0%)	11(21.2%)
9 校長(田尻常雄)の教育方針に共鳴	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (15.4%)	2 (3.8%)
10 校長(岡野鑑記)の教育方針に共鳴	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
11 家業を継ぐ必要から	1 (6.3%)	1 (4.0%)	2 (15.4%)	4 (7.7%)
12 家業の継承を避けるため	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (15.4%)	2 (3.8%)
13 徴兵上の有利な条件に魅かれて	2 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (3.8%)
14 そ の 他	2 (12.5%)	3 (12.0%)	2 (15.4%)	7 (13.5%)
	16	25	13	52

注1) アンケート有効回答61のうち、1944年以前の入学者3名、戦後になつての編入者4名、無効1名、その他1名の9名を除外した。

注2) 選択肢は3つ以内で選べることにした。

だ根強く残っていたのである。それだけに「YCC」にあらがれて居りましたので名前が変わる事について非常に残念に思いました」(九一)という受験生もいた。憧れが優先されることで、「8 将来の経済的な安定」志向がなかったのは、中学校出身者と対照的であった。

「4 他に希望する学校の改善の選択」は意外に多かった。「私は旧制高校文科を希望したが、昭一八年秋東条軍事政権は無謀にも文科の学生の徴兵延期を廃止した。よって旧制高校理科を中学四修でトライしたが失敗し、ここに辿り着いた」(一二)とか「教校受験した後の最後の受験であった、戦時中浪人は許されず、失敗すれば軍需工場で働かねばならなかった。最後の頑張りで合格出来非常に嬉しかった」(一〇〇)という回想は、この時期の受験事情の背景をよく物語っている。

受験動機が鮮明という点で、「6 専攻したい学科があったから」に中学校出身者が比較的多く集まっている。「経済学」(三名)、「会计学」(一名)、「経営に必要な科目」(一名)という経済経営関係に加えて、「工業経営」と答えたものが三名いたことが注目される。高等商業と工業経営との違ったイメージが浮かび上がってくる。

「1 将来の職業を強く意識して」は、この時期の若者が自分の将来に確実な「死」を予想していたことと裏腹の意識になる。県内外の中学校出身者に「8 将来の経済的

な安定」も一定程度いる。これらは、もし「死」をくぐり抜けたらという仮想現実からの選択であったのかも知れない。また、中学校と実業学校とを問わず、県外出身者に「7 『横浜』という地へのあこがれ」が比較的多く認められるのは、戦争末期の状況にあっても、若者の正直な気持ち^①が直接的に表現されているところである。

もちろん、この数字は合格者全員の統計ではなく、いわんや受験生全員のそれでもない。ただ、この時期だからこそという点とこの時期にもかかわらずという点が絡み合っていて、受験生特有の動機や意識が随所に垣間見ることができる。

続いて、どのような入試状況であったのかをみてみたい。まず受験者数の推移であるが、一九四四年度入試については、『受験界』など、当時の受験雑誌にあたってみたが、具体的な数字は把握できなかった。参考までに、一九三五年度からの推移を「表2」にあげてみよう^②。

従来入学試験は、第一部中学校出身者、第二部商業学校出身者の二部制で実施されていた。違いは、後述するように入試科目に数学か簿記を選択することで、入学許可の比率も中学二対商業一の割合であった。入学志願者数は、一九三六年までは経済不況の深刻化により特に商業学校からの志願者が減少していた時期である。入学許可比率は二対一で変わらなかったから、中学校出身者には厳しい競争率

〔表2〕 入学試験の状況

	入学志願者数			合格者数（競争率）		
	合 計	中学校	商業学校	合 計 （競争率）	中 学 校 （競争率）	商業学校 （競争率）
1935	1,252	959	293	176 (7.1)	126 (7.6)	50 (5.9)
1936	1,444	1,083	361	153 (9.4)	98 (11.1)	55 (6.6)
1937	1,256	874	382	170 (7.4)	110 (7.9)	60 (6.4)
1938	1,380	921	459	179 (7.7)	113 (8.2)	66 (7.0)
1939	1,309	823	486	167 (7.8)	100 (8.2)	67 (7.3)
1940	1,433	809	624	172 (8.3)	79 (10.2)	93 (6.7)
1941	942	475	467	213 (4.4)	91 (5.2)	122 (3.8)
1942	761	385	376	207 (3.7)	81 (4.8)	126 (3.0)
1943	1,543	1,036	507	—	—	—
1944	—	—	—	[約150]	—	—

注1) 『横浜高等商業学校二十年史』(1943年5月) p. 219 より作成。

注2) 1944年度の[]は募集予定人員(『文教維新の綱領』新紀元社1944年4月付録p. 21)。

であった。その後軍需産業の好況により商業学校出身者が増加していくと同時に、中学校出身者も増加していった。一九四一年に受験者数が激減しているのは、文部省が高等学校と実業専門学校との試験日を同一日とし、複数受験の

機会を無くしてかけ持ち受験ができなくなったこと、高校または高等工業学校への進学希望者が増加したことから、この年は「見離された高商 開校以来の志願者減」であった。^④一九四二年の競争率三・七倍も、前年から入学定員が二〇〇名に緩和されたこともあり、「開校以来の最低」となった。一九四三年からは試験日は再び高校と専門学校とが別々の日になり、受験者数もほぼ倍増したが、文部省が入学試験のいっさいを統制し「試験問題はすべて、文部省が作成出題するという中央集権化ぶり」であった。^⑤一九四四年の入試も、その延長線上にあったと思われる。

一九四四年度の募集人員は「約一五〇名」^⑥と減員が指示されていた。受験者数も正確にはわからないが、「約一六倍の関門であった」^(二〇)、「受験の競争率が一〇倍を上廻っていたことが印象的」^(七一)、「当時合格率は九分の一だった」^(八一)とさまざまであるにせよ、前年と同様に多くの受験者を集めていたことはわかる。入学試験の時期についても確認することはできなかったが、「学制の変更により受験日が受験シーズンから大きく後半にズレたので、第一志望だっただけに不安が大きかった」^(五二)、「経済専門学校から工業専門学校に変更になったため、官立の入試で最終の四月になってからと記憶している」^(一〇四)と、遅い時期での実施であった。

受験科目については、高等商業学校から工業経営専門学

校への制度変更にともない、科目も変更されている。従来は、中学校卒業生には、英語、数学、国語、漢文、日本歴史が課され、商業学校卒業生は数学の代わりに簿記で受験できた。それが、入試科目から英語が除かれ、代わって物理と化学とが加わり、さらに数学と簿記の選択が数学だけになったのである。体育の試験も課され、面接も重視された。また推薦入学制度が廃止されたことも、改革のひとつであった。このような入試科目の変更は、いうまでもなく新しく衣替えをした学校にふさわしい人物を選考しようとしたものであるが、突如として変更された事態に、受験生の方は戸惑うばかりであった。

その変更は、「横浜高商受験を前提にしていたので、途中で制度が変わったこと及び受験科目に物理、化学が加わったのが苦痛だった」(五二)、「文系の入試科目のみと思って居た所、理科(当時の物理化学)の試験科目があったこと。入試科目に英語がなかった」(九二)、「急遽試験科目の転換に迫られ苦労した」(六八)というように、受験者らとって有利不利のさまざまに、大きな影響を与えることになった。特に商業学校出身者にとっては「横浜高商時代とはかなり異なり、物理、化学の問題も併せて出題され、その中の問題で印象的なのは、汽缶にカルシウムが沈積しパイプがつまること(硬質の水を使うことによる)の原因の証明が出題され、商業学校出身者には難解?ではなかつ

たかなと思ひ印象に残っています」(二四)、「数学の出題は五問だったと思う。従来の数学、簿記の選択が数学だけになって、商業学校出身者には不利だった。第一問目でつまずき、考えるのに時間を費やし過ぎてしまった。(中略)それほど難問ではないと解ったのは後のことで、実業学校出身者の独力で補充した数学の俄受験勉強の知識には、中学生なら知っていなければならぬ法則のひとつが欠けていて、解答できなかったのである」(三七)、「物理の試験に投影の問題があったが商業学校の習得科目でなく、商業図案科目を思い出し適当に投影図を書いた」(六二)と、今までになかった受験科目に苦労していた。「商業学校から高等商業学校を受験目標とした者にとり、横浜高等商業学校は非常に難関」(二〇三)であったことから、受験科目の変更は深刻であったのだ。工業学校からの受験者は、「工業学校から高商受験なので一緒に受験する仲間が居なかった。他の受験生は仲間同志で話し合っている姿が印象的であった」(九四)と、まだ工業学校からの受験者がごく限られた人数しかいなかったことがわかる。

それに対して、むしろ有利に働いたのは中学校出身の受験者であった。「皮肉にも理科系の科目の得点により、中学四修で合格した」(五一)、「①中学ではフランス語を専攻していたので受験科目に英語がないことを知り、受験対象校にすることが出来た。②理数系が得意であっただけに

入試で数学は満点を取れたと思えたので合格は確信していた」(五三)、「中学二年の時、米英と戦争になり、英語の勉強を止め、理数系にのみしていたので問題はなかった。(中学四修で入学もできた)」(八八)といった回答がそれである。

試験問題については、数学、国史、体力テスト、面接について複数の回想がある。

数学は、「試験問題が新制度らしく、実用的な問題が多かった。難解な問題がなく、数学、理系の問題は実用性に富んでゐて、定理とかを理解してゐれば解ける問題であった」(五六)という評価がある一方で、可否を分ける科目としても意識されている。「入学後、数学の教授より聞いた話であるが、平均点で数学の問題が特に悪かった由」(二六)ということであり、「数学の問題がかなり難しかったが、自分でも満足のゆく解答が出来たので、これで多分合格出来るだろうと思った」(八一)受験生がいたり、「数学の問題が難解であったので、他の科目は自信があったが数学の得点で不可と出るかと思った」(六五)受験生や「数学が苦手であったので合格するとは思はなかった」(二八)受験生がいたりで、数学の出来不出来が可否を左右すると思われていた。「数学の問題で北緯三五度〜三六度、東緯一三五度〜一三六度の区域を五万分の一の地図にしたときの面積を求める問題」(五二)を複数の対象者が記憶

しており、「当時としては斬新な出題であった」(八〇)としている。

国史については、「記述式で二問。一問目は『鎌倉時代の美術工芸について述べよ』とあり、『これなら書ける』と思ったので記憶に残っている」(三七)問題があり、また「問題第二問に『明治時代に於ける産業及び通信、交通機関の発達についての概要を述べよ』に接し、今迄の歴史に対する見方を専門的に学び直さなくてはならないと痛感した」(五)受験生もいた。

この時期の受験科目の特色は、体位向上の観点から体格検査が加わったことであり、また口頭試問が重視されたことであった。従来、体格検査および口頭試問は、後述の無試験入学者に対してなされていたものであったが、無試験入学の廃止にともない学科試験合格者全員に実施されることになったものと思われる。

「印象的だったのは体操の試験があった」(九八)とされているが、可否判定にどの程度の影響があったのか、定かではない。種目は「飛箱、懸垂、千米競争等」(八九)で、「グランドを何周かさせられたが、これが大分こたえた。左腕の自由が利かなかったので教練の教官、体育の教官よりきびしい注文がつけられた」(三)受験生もいた。

口頭試問は、「岡野鑑記校長の面接の時の協和服姿と口髪が思い出にある」(一〇)ように、校長も面接に立ち会

い、「採用が人物本位にかたむいていた」(八四)とする印象が持たれていた。面接の質問内容には、たとえば、「教育勅語の国体の精華について」(二五)や『海征かば』の歌曲についての感想」(四三)などが含まれていた。

競争率については、その高い様子をすでに紹介したが、試験そのものは「余り難しくなかった」(三四)、「さほどむずかしいものではない」(八四)、「かなりよく出来たので多分合格するだろうと思っていた(全科目について)」(二二)、「数学と物理は満点だったと思います」(九一)と、合格した受験生の自己評価は概して高かった。それでも「試験場で同級生三人と出会いましたが、入学は私一人でした」(九一)、「競争率の高かった学校に入れて嬉しいと思つた」(五四)、「試験成績が不安で発表を見に行くのが不安で、夜になって見に行き合格してゐることが判り、安心すると共に大変嬉しかった」(九八)というのが、やはり率直な感想であろう。受験にかかわって、印象に残つたとする「初めて足を運んだ横浜の清水が丘への桜並木と白亜の校舎の白さ」(一六)と「清水が丘の白亜の殿堂の素晴らしさ」(七一)のなかで、学ぶことが現実のものとなつた瞬間であつた。

なお従来、主に中等学校の「在学中各学年ノ成績全数ノ十分ノ一以上ニアル者ハ履歴書、体格検査及口頭試問ノ結果ヲ参照シ筆記試験ヲ省略シテ入学ヲ許可スルコトアルベ

シ」⁽⁴⁾との所謂推薦制度が廃止された。「当時、中等学校在学中の成績優良者に対し、出身学校長の推せん内申書による無試験入学制度があつた。私もこれに応募したところ、入試前日、本年度(昭和一九年度)の推せん入学制度は無く、全員受験するようにとの掲示に、一瞬戸惑つた。そして受験した」(四六)という慌たしさであつた。

受験科目や方式の変更は、学校側が採りたい人材を限定するために執られる手段である。しかしこれまでみてきたように、受験生の志望動機や意識をみてみると、必ずしも「工業経営専門学校」としての性格が充分に理解されていたとはいえず、受験生にはむしろ高等商業学校の受験として捉えられていたというべきであろう。

(40) 『横浜高等商業学校 千年史』一九四三年五月 二二七—二〇頁。

(41) 『読売新聞』一九四二年三月六日。

(42) 『輝く白壁—横浜国立大学経済・経営学部五十年史—』一九七五年 二四七頁。

(43) 前掲『文教維新の綱領』付録二二頁。

(44) 文部大臣橋田邦彦宛「本校規則改正ノ件認可申請」校長田尻常雄(一九四一年二月五日)『目大一九三一年一月 横浜経済専門学校 高松経済専門学校』第九—一〇冊。

第三節 工業経営の学科課程とその学習

一九四四年四月に入学した対象者たちは、横浜工業経営

専門学校でどのような勉学を展開したのであろうか。その学科課程は一九四四年一月三十一日に発表された「商業専門教育刷新」において「別紙ノ如ク」とあり、文部省が直接学科課程を指示したようであるが、その学科課程は現在確認されていない。

いづれにしても、高等商業から工業経営への転換が急であつたことから、「工業経営専門学校設立の趣旨は発表されてきたが、入学前にカリキュラムの全貌は明らかでなかつた。入学後、授業内容を示す時間割表で知つた」(四六)、「如何なるカリキュラムがあるか、全く予想が立たなかつた」(六五)という学生の感想は、もっともなものだつた。後にみるアンケートにもでてくるが、工業関係の授業を横浜工業専門学校(旧横浜高等工業学校)において実施するため、具体的な学科課程編成に対応する担当者の配置に、両校の間でさまざまな調整があつたことも予想される。

〔表3〕は、一九三二年度から改定のあつた四〇年と四二年の学科課程表を掲げたものである。四〇年改訂ではそれまでの選択科目がなくなり、新たに教練が導入されるなど、大幅な科目の統廃合が図られている。さらに四二年改訂では、教練の科目としての独立、第一外国語教授時数の激減、東亜経済論・工業概論といった科目の新設、さらに学校長指定による特殊学科目の特設化など、「商業教育ノ目標ヲ配給、産業経営、貿易ノ三分野ニ置キ之ニヨツテ全

教科ヲ有機的ニ統合教授スル」観点、「商業報国精神ノ確立、国体観念ノ徹底、東亜共栄圏ノ確立」および「心身鍛練ノ強化」の観点から、大幅な学科課程の改訂が行われていた。特に第三学年の特殊学科目は「帝都ノ関門タル横浜並ニ帝国實際ノ中枢地、大工業地帯ニ近接スル本校ノ特殊的位置」を踏まえた、改訂のポイントとなる科目群であつた。

一九四四年の学科課程は、その四二年改訂を再度改訂する形で工業経営専門学校の学科課程が文部省より指示されたとと思われる。工業経営専門学校の設立趣旨も、学科課程を考える参考になるので、ここで掲げておこう。

工業経営専門学校設立ノ趣旨ハ時局下工業経営能率ノ増進ヲ図ル事ハ極メテ肝要デアルガ從來ノ経営担当者ハ技術ニ理解ガ乏シク又技術者ニハ経営方面ノ知識才能ニ乏シク、之ガタメ経営能率ノ向上ヲ阻害シ生産ノ一ツノ隘路ヲナシテ居タ実情ニ鑑ミ、技術ニ対シテ十分ナ理解ヲ持チ近時問題ニナツテキル勤勞管理、作業管理、原価計算等ニ付テハ十分ナ知識技能ヲ持つ優秀ナ工業経営担当者ヲ養成セントスルニ在リ

これを受けて、岡野校長も次のようなコメントを発表していた。

従来は商業経営に関する学科が大部分だったが、工業経営専門学校になると、これらは挙げて工業経営に必要な諸学科に切替へ、経営に関する学科および技術に関する学科の二本建となるが、特に工業技術の学科が採入されたことは注目に値する。すでに相当重工業方面に卒業生が進出してゐるが、これによつて従来技術に関する知識のない工業経営に代つて、一応技術を身につけた工業経営者が生まれる訳で、学校としても実験室を備へつける考へである。従つて教授、講師にも相当数の入替りがあることは言ふまでもないが、たとへ学校の看板は變つても、当校の教育方針は不変で、飽まで信念の人を造るにあることは言ふまでもない。

としていた。これらにアンケートの記述を重ね合わせることで、新しい学科課程がある程度予想される。もっとも専門学校での学習といつても、「授業も昭和一九年秋頃で中止され、東芝への勤労働員となりました」(五二)というように、勤労働員体制が強化されていく。十分な授業展開がなされた期間はさほど長くはなかったものの、学生たちはその新しいカリキュラムを、どのように評価していたのだろうか。

まず新しいカリキュラムは、予想どおりであつたとする声は意外に多く、一五例近くにのぼつた。「工業経営は、

当時は全たく新しい学科でしたが、予想した通りでした。主として、従来の経済学の流れの中で工業簿記、原価計算と質的变化の他に電気、化学実験などもありました」(八九)、「高商の科目の中に工業の基礎的な科目と工業簿記などの科目が挿入されていたという感じがした」(九四)、「経営という文科学分野に根本的に変わりはないので、主対象が工業となつても殆ど関係ない。従つて概ね予想通り」(八〇)、「当初から工業経営ということで商業出身者にとつては予想に反していたかも知れないが、中学出には抵抗はなかった」(八四)、「内容はさしたる変更はなく、経済関係の講義が主体であつた」(八七)、「想像していたよりも理数系が多く、特に困らなかつた」(八八)、「横浜高等商業学校に入学した訳ではないので、カリキュラムが全面的に改定された訳ではなく、違和感は全くなかつた」(九八)といった感想が並んでいる。

たしかに予想はしていたけれども、特に理工系の科目が増えたことに戸惑いを感じている学生も多い。「校名に『工業』とはあつても、『経営』と名付けるからには、それほど違わないだろうと思つたのは誤りで、機械工学、電気工学、物理学、定性分析、定量分析などの科目には閉口した」(三七)、「校名が工業経営に変わつても旧高商なのでカリキュラムは商業主体と思つていたところ『工場経営』『工業簿記』『実験』(横浜高工へ出向く)等が入り意外な

感じてした」(六〇)、「新しいカリキュラムには理科系の科目が当然乍ら組まれており、電気では当時弘明寺にあった横浜高等工業専門学校へ、モーターの実習に行ったり、機械学では、機構学の教科があったりで、この程度は初歩或いは基礎的な段階なのではしたが、予想していたとは云え、商業出身者には刺激が強かった」(二四)、「数学、電気、物理は予想した通り全く苦勞した」(六二)といった戸惑いである。また「商業英語がなくなったり、経営学に“皇国史観”とかが挿入されたり、教練の時間がふえたりした」(一〇)点に、変化を認めている学生もいた。

この理工系科目の増加については、「理科系の学科授業が想像以上に多く、当初勉強に戸惑ったが、然し興味深い授業が多かった」(三)、「自然科学分野の学科があるのが気に入ってゐた」(二)、「会計学、簿記学等が商業(簿記)中心から工業(簿記)中心へと変っていった時代であり、原価計算を中心として、これから重要性の増す部門であると思っていたので、好ましい内容と思った」(五四)という好意的な受け取り方をしている学生もいたが、それは少数にとどまっている。

工業経営専門学校全体の学科課程については、消極的な評価が圧倒的に多い。「間口が広すぎて、中途半端な感じがした」(三四)、「付け焼い刃的で商業の勉強に理系の学科をつけ加えて教えていた」(五六)、「工業経営と云う名

には、ふさわしい内容ではなかった。何かおぞなりの内容であった」(三八)、「文科・理科の総合を目指すというところでそれに共感していたが、どっちつかずという疑問もあった」(四〇)、「電気や機械の実習があり、校長は高商ではなく工業経営のユニーク性を強調したが、本気にそうは思っていないかった」(二二)、「改定直後のため高商半分高工半分の授業で統一された流れがない感じだった」(八一)、「カリキュラムも改訂された後、経済課目も工業課目も殊に工業課目(イダ)は中途半端なものでした。同校の特色であった経済課目に重点を置くべきだった」(一〇三)といった評価である。またその指摘も具体的である。「カリキュラム全体にその統一性とネライが欠けていたと思う。これは時局の要請に応じようとの意識だけが先走って、明確な理念とカリキュラム編成に必要な調査・研究の時間がなかった」(五二)、「工業経営という学問的体系は、まだ整っておらず、高等商業の延長という形でスタートしたように思います。現代では工業経営に違和感はありませんが、当時は経済原論と電気工学が同居するという恰好で無理だった」(二五)と、それぞれに厳しい。

「経済原論や会計学を学びながら機械工学や電気工学を学ばなければならず、宮本武蔵の二刀流に喩えるならば、経済なる長剣(会計学など)と技術なる短剣(機械工学など)を帯する者である」(四六)と説明されていた学生は、

そのために「清水ヶ丘から弘明寺にあった横浜工業専門学校（高工）まででかけて、モーターの回転数の計測実習の授業を受け」（四二）なければならなかった。しかし、この横浜工業専門学校（高等工業）での授業についても批判が多い。「工業系学科を弘明寺の旧横浜高工に行つて学んでいたのでロスタイムが大きく、而も当時は学徒動員や勤労奉仕が多く勉強は余り出来なかった」（五三）、「横浜高工（弘明寺）まで出かけて授業をしたり実験をしたり等々、教授もカリキュラムも不十分であつたと思う」（三八）、「電気工学は、横浜高工（弘明寺の）に行つて実験や一年間勉強したし、機械工学は構造学（？）等難しくてよく分からなかった」（五六）、「電気の講義は難しく理解出来なかった」（八三）、「非常に不備でした。文科系が、工業学校で教わる学問もしなければならなかった」（五七）といった批判である。個人的に「自然科学分野全般に興味があり特に高等工業学校での実習は印象に残つた」（二二）し、「理科系、特に数学はよかったので実務面ではプラスでした。横浜高工へ理科の実験でたびたび勉強に行った事も将来的にはよかった」（五七）と考えたり、あるいは「工業経営を学習する以上、工業技術の習得のため弘明寺の高等工業学校へ電気系の実習に何度か徒歩で往復した」ことを「当然のこと」（五五）と捉える回答がないではないが、工業関係の科目の「大部分は『横浜高工』の教授が

講師として受け持つてくださったが、試験の結果には全く自信がなかったにも拘わらず進級できたのだから、成績にはかなりのお情け点が加えられていたはず」（三七）と工業経営の学生にはダブルスタンダードの評価基準があつたことをうかがわせる記述もあつた。

新たな学科課程を用意するには、工業経営という学問の体系に共通認識が得られていたとは思えず、教授陣が大幅に変わった訳でもなく、「戦時体制に合せた、文部省通達があつた様だ」（二〇）という「外圧」からの学科課程の改訂であつたというべきであろう。それゆえに、教員スタッフの補強や教授施設などは準備しきれないままの出発となり、工業経営専門学校としての学科課程に対する責任体制はあまりにも不十分であつたといわなければならない。

（45） 前掲『文教維新の綱領』付録二二頁。

（46） 文部大臣橋田邦彦宛「本校規則改正ノ件認可申請」横浜高等商業学校長田尻常雄（一九四一年二月五日）（『大正十三年一月 横浜経済専門学校 高松経済専門学校』（第九一〇冊）。

（47） 注（44）に同じ。

（48） 『読売報知』一九四四年二月一日。

第四節 教師群像が語るもの

このような学科課程を担当する教師についての印象は、どのようなものであつただろうか。対象者は、一九四四年

四月に入学して三年後の一九四七年三月に卒業している者がほとんどである。「昭和一九年四月〜二〇年六月の一五ヶ月と昭和二〇年一月〜二二年三月の卒業までの一七ヶ月では学校名も官立横浜経済専門学校と変わりましたが、雰囲気も一変しました」(八九)というように、学校の雰囲気や同じ教師についても、敗戦をはさんだ戦前と戦後との印象は異なっている。その意味で、以下の引用は戦前から戦後にわたるものであることを断っておかなければならない。

ここにあげられている印象に残る教師群像から言えることは、横浜工業経営専門学校は、教授陣が学生に与えた学問的人間的な影響力からして、基本的には高等商業学校の伝統を引き継ぐものであった、ということである。「入学後の授業は先生方の熱心な講義により充実しておりました」(二〇三)、「教授陣は極めて優秀で、それぞれ自分の専門分野をきっちりと守り、右顧左眄することはなかった。学問の世界は真理の探究の世界であり、戦争との直接的かわりはないものと知った」(五一)、「学問の本質は変わらなかったと思う。英語の教授は『敵国の言葉を学ばない』というのは、おかしい。むしろ、より一層研究し、英米を知るべきではないか』と言っていた」(二一〇)といった回想が実感を込めて語られている。

対象者に特に強い印象を残している二人の教授がいる。経済原論担当の越村信三郎教授(一九〇七年〜八八年)で

あり、会計学担当の黒沢清教授(一九〇二年〜九〇年)である。それぞれ一五名以上の記述があった。それらの回想を重ね合わせていくと、当時の教授の風貌や授業風景が浮かんでくるようだ。

まず越村信三郎教授については、「終戦以前は、重商主義、国富論に繋る資本主義経済学の講義」(六二)が中心であった。「学究肌の先生で独特の口調」(二五)でなされる講義は、「アカデミックで重厚」(一〇二)で、「第一時間目の授業に、経済学主に原論の本が四〇冊程のったプリントを渡され、これ等の本を読んで下さいと云われオドロカされ」(五六)た学生もいた。「価値論。物の価値は何によって決まるか? 古今東西の価値論」(七三)についても論じ、戦前は「マルクス学的解釋により、文部省より注意を受けたとの話を聞いた。学問の自由を守り続けた学者の一人」(二一〇)としても捉えられている。

学問的には、『経済循環の基本図式』なる自著により、経済社会の成立を図解と数字により説明せんとした」(一〇)、「いわゆる学問にくみせず独自の研究に没頭、経済循環の基本図式“をはじめ経済学の理論に数式と図式を活用されました”(二〇三)、「循環経済学という数式的内容で科学的であった」(四三)というように、経済循環を数学的に説明していく科学的な姿勢が一貫していた。戦後になって「マルクス資本論と変り、乖離した理論を如何に調

和させるかにとまどった。然し乍ら社会主義理論を多少知り得た事は確かである」(六二)、「リカード、マルクスの話には興味深かった」(三)という回想もある。その人柄についても「学者としては常に研究に精進し、その成果を著書として世に問い、教育者としては若い私達をよく御指導下され、学問の楽しさを開眼させて下さいました」(一〇三)、「真面目な勉強家であり、ゼミテンでもあったので一番印象深い」(九八)、「先生の学者としての人間性」(七三)など、絶大な信頼を得ていた。「何事も一つの事をやるからには徹底的にやれと云われた事」(五六)を覚えていた学生もいる。この越村教授は、戦後横浜国立大学学長(一九七〇年～七三年)になっている。

黒沢清教授は、特に講義の評判が高かった。その講義について「明快な講義ぶり」(三四)、「時代の先端を先き取りした思考で生徒を引きつけていた」(五四)、「限界効用学説について魅力ある講義をされた」(二八)、「講義は鼻にかかった名調子で、解説が大変面白く理解に役立った」(九八)といった回想が続いている。「学期末に黒澤教授が『テーマは何でも良いから小論文で…』との注文を錯覚して、見当違いの『桜に関する随想(?)』を提出したが、教授は比較的良好評価点をつけてくれた。教授の意気な図らいであった」(一六)と感謝している学生もいる。

学問的にも、もちろん「只管学問あるのみで自主独往の

新分野への提案は、学者の生き様であった」(四三)し、「海外の経済学説の流れを新しいものを多く取り入れて紹介して」(三九)いた。このような「人間的、学問的な視野が広い」(八〇)黒沢の戦争への評価は、「此の戦争で日本が勝ったにしても半死半生だといっていたし、敗戦ということをにおわしていた。私達も莫然としていたが、そう信じていた」(八四)というものであった。この黒沢教授も、戦後越村教授より早く横浜国立大学の学長(一九五九年～六五年)を務めている。

そして会計学・簿記学担当の沼田嘉穂教授も講義に人気があった。「中学出の私には、初めて出会ふ科目なので不安と興味が錯綜していたが、始めの講義で『タバコ屋の看板娘は資産にあらず、何故ならば、彼女は貨幣価値に換算出来ないからである』と言われた事に大いに興味を持ち、スムーズに授業に入って行けた」(五)といい、「会計学そのものが新鮮にうつった」(四)、「解り易かった」(三四)、「どことなく教授然としたよい講義」(一二)であったという。「授業が楽しかった。先生が教室に入り、授業を始めると、ドイツ語の本を見つつ、日本語にすらすらとなおして話されるのにはびっくりした。教授と云う人は皆、語学がすばらしいとつくづく感じた。中学校の教科書の数十ページの本を『自分は一日で書き上げる事が出来るのさ』と自慢していた」(五七)という逸話もある。この沼田嘉

穂教授は先の黒沢清教授とは切磋琢磨の関係にあると、学生たちは見ていた。「お二人の強烈なライバル意識。しかし、学者としてのお二人には尊敬の念を持ちました」(五二)といい、そもそもそのふたりがいたことに「全国区的知名の高い先生が一高商にいたことにびっくりした」(九二)学生もいた。

その他に、統計学担当の森田優三教授は「近代経済学に目覚めさせてくれて将来の方向をきめてくれたありがたい講義」(一一二)を提供し、「統計解析理論等が銀行就職後に役立った。又、数学が好きな私は授業中も興味深く学ぶことが出来た」(六〇)といわしめている。もともと、逆に数学が苦手な学生には「とに角、難解というか、頭を痛めた印象が強かった」(七九)教師として記憶に残っている。商業数学を担当していた小幡孫二教授にも、同じく数学が好きな学生とそうでない学生とで印象が異なっている。前者の学生は「函数論(微分、積分、行列式等)が大変面白かった。一年だけで終わったのは残念」(九八)といい、一方後者の学生は「数学には弱かったので、微分の時は眠くて閉口しました」(二四)としている。「夏場は水泳(体育の時間)の後に数学の授業があった。当時は食べ物だけでなく、栄養不足と体力消耗のあとの授業であったことと独得のゆっくりした発声による講義であったため、大半の者が寝ていた」(五三)が、「教え方に特徴あり。今でもそ

のマネをするものが多い」(八一)など、印象は好意的である。この小幡教授は、敗戦を待たずに退職した教師の人であった。

徳増栄太郎教授には、「ギルド時代の講義」(九七)、「欧州経済史及び経済学史で学問の系譜を教えられた」(四三)だけでなく、「ゼミナールの先生で、就職を熱心に考えてくださる教授」(五三)でもあった。「戦時中禁断の学問であったマルキシズムが終戦を契機に全貌を顕した。徳増教授、渡辺(輝一―引用者注)教授、越村教授等々戦時中の隠忍から、水を得た魚のように生々と熱弁が蘇生した。その新鮮さに私自身、青春の一時期をマルキストとして過した」(五一)という。「ゼミで『経済政策』が専攻科目でしたが、マルクス経済学に変わって行ったのが印象的であり、大きな影響を受けました」(八九)、「戦前からの博学多識が一挙に吹き出た感じで該博さは類なし」(四三)だった経済政策担当の渡辺輝一教授の名もあがっている。この徳増、渡辺両教授は、戦後横浜国立大学経済学部長を務めることになる。

「プロテスタント信者で崇高な人格者」(五三)で「階段教室での講義は忘れられない」(九八)商品学担当の南種康博教授、「よく噛みしだいた親切的な講義」(七九)で「東京商大受験の為、卒論を経済原論にて提出したが、懇切に指導頂いた」(六二)財政学担当の井手文雄教授など、

続々と登場してくる。もっとも、岡野鑑記校長については「マルクスの唯物辨証法と世界最終戦争論が面白かった」(九八)という一例があるのみであった。珠算担当の山崎与右衛門先生には、「中学出身はまことに下手でしたが試験が非常に甘かった」(九二)、「商業卒が対象となり中学卒ではついて行けなかった」(一〇〇)と苦い経験が語られている。

経済学関連以外の科目担当者については、多岐にわたった印象が語られている。教授時間数が減ったといっても英語の教師にまつわる印象もある。沢崎九二三教授についての「お前達は高商創設以来の英語が出来ない」とあきれていた」(一一)、「読解は分量も多く大変悩まされた」(九八)、「分り易い講義なるも、テキストは難しいものを使っていた」(一一三)、「専攻の英語に止まらず、音楽をはじめ知識の豊富なことに何時も感じておりました」(一一〇三)という印象、河村重治郎教授についての「入学後の最初の授業で目で学んだ語学の弱点をつかれ全員ギブアップしたが、教授云く『この学校に諸君が入学出来たのは、諸君が優秀だからと思うのは大間違い、落ちた人達が出来な過ぎたんですよ』と。授業も独特でリーディング主体。読書一〇〇遍意自ら通ず式でした」(一一〇二)という印象、渡辺彌教授についての「戦時下乍ら極めてオーソドックスな授業」(八〇)という印象などが語られている。概して、英語に

苦労した学生の回想が多かった。

体操担当の下津屋俊夫教授は「心血を注いだ体育館に対する愛情」(五二)が溢れており、いつも「オリムピックのユニホームを着て」(二四)いる教師であった。一九三二年にロサンゼルス・オリンピックに日本体操チームの総監督を務めた人物で、「体操で勅任官三等の先生は珍しかった。『徳』をとなえる先生」(五三)でもあった。「体育館が完備されていたので、大いにしぼられた」(九一)が、その体育館も空襲で焼失してしまう。塾監で修身を担当していた富成喜馬平教授は「哲学研究班での人生論」(七九)を交わし、出征をしなければならなかった学生にとって「特に哲学の富成喜馬平先生は忘れ難い」(四〇)存在であった。教練担当の〇教官については、ここでは「校庭では専ら銃剣術を練習させられ、教官自身も全国大会で優勝されたことを話しておられた」(二四)という一例があるのみである。

このように、圧倒的多数の対象者が経済学関連の教授を印象深い教師としてあげているのである。たしかに「電気工学の藤川教授(高工からの先生)人柄のよさを感じさせる教授であった。物理学の加藤教授(高工からの先生)物理学の初歩を平易に講義され、面白かった」(三)や「機械工学(細川講師)文科系学生にとっては全く新しい科目と思った」(六五)という記述もあるが、ほとんどこの二、

三例にとどまっている。学生の関心は、あくまでも経済学関連の科目にあり、その科目を担当する教授陣の学問的、人間的影響力を強く受けているといえるだろう。先の学科課程への消極的評価とも重ねて考えるならば、このことはとりもなおさず、横浜工業経営専門学校が、戦時下末期にあっても、その基幹とするところは高等商業学校としての内実を継承させていたと解釈することができるのである。

(49) 前掲『輝く白亜』二五四～五頁。

第五節 軍国主義教育の実際

入学してきた横浜工業経営専門学校は、どのような学校として新人生に映ったのであろうか。決戦下一九四四年四月の入学、校長も建国大学から岡野鑑記を迎えての初めての新人生であった。軍国主義教育の実際を確認しつつ、そのことが対象者からどのように評価されているか、またその評価の意味についても考えてみたい。

まず日常生活の場面での変化を具体的にあげてみよう。まず学生服は「従来の黒色の詰め襟に代わり、云わば国防色の折り襟と軍人同型の張り金の入った帽子で統一された」(四六)。制帽も変わった。「横浜高等商業学校時代の帽章(制帽につける校章)はYCCに商業の神のマーキュリーをあしらったものであったが、吾々の入学時からカーキ色の帽子に金鶏(キンシ)(神武天皇の東征の時に弓の先に

止ったと伝えられる金色の鷲といわれ軍功の軍人に下賜された勲章となった)をデザインされた勇ましい感じのもの」(五五)になった。高商の記章に憧れをもっていた学生にとって、それは「変なハトのマーク」(一一二)と映り、「軍帽を真似た学帽の着用を強制されたこと。軍の学校へ入校した訳ではないのに何故という思い」(五二)を持った学生もいた。いずれにしても「軍服みtainな制服・制帽」(八八)になったのである。

クラスの呼び方も、従来の「ABCDのクラス編成を、忠、誠、勇、武と改称した」(八三)。そして「クラスの級長が『挺身隊長』と呼ばれた」(一一二)。「ラグビーが斗球、バレーボールが排球等と言うように(中略)国粹的言動がふえ」(七三)、当然のことながら「図書館ではマルクス主義の本は借し出し不能」(一一二)になっていた。カリキュラムについては、「語学教育の軽視：英語の授業時間の減少。勤労動員あるいは学校工場への積極的参加」(一〇三)によって、実質的な面でも教育内容は変更せざるを得なくなっていた。

「学校教練と寮生活」(七〇)と指摘されているように、軍国主義的な教育で特徴的な二つについても、多くの対象者が触れている。寮生活については、まず「学寮富士見寮が養正塾と改称され」(七三)た。それは「寮“ではなく”塾“であって、入塾は学生の希望ではなく校長の命令で、希望し

なくても強制的に入れられるのであり、希望しても学校側が許可しないと入れない。又、一班が一年生六人で八班あり各班には二年生の班長がおり更に三年生の総班長が全体を統率する組織であり、起床、洗面、廊下、室内の拭き掃除点呼屋外での木剣体操、食事、就寝前の点呼は居室の前に整列し軍隊式に全て班長の命令で実施する」(九八)というものであった。道場型での人間形成は、この時期のひとつの流行であったのだ。

通学生が「寮生活を嫌い、下宿先から通学していましたが、特に束縛は感じませんでした」(六一)という印象をもっていることからすれば、養正塾では「生活の画一化」(二〇三)がなされ、その「生活は予備士官学校の予科と思えと塾監に云われ」(九二)るほど、軍隊さながらの生活であった。「朝晩の点呼、少ない量の食事等、若い我々には大変こたえた」(九二)という。もっとも「五月に入學。九月に出征したので教科についての印象はないが塾の印象は心に焼きついてゐる。多分軍隊生活の地獄の体験のため、一層美しく昇花したのだと思う」(四〇)という回想からすれば、それでもまだ寮生活はましであったのかも知れない。

また、軍事教練についても多くが語られている。たとえば、次のようなエピソードが印象的に語られている。

「軍事教練の時間のこと、我國の現況説明後、『今後、

日本はどうなると思うか』と解答を求められ指名されたMが、『はい、負けます』と答え、『貴様のようなヤツが日本を駄目にするのだ』と教官にいくつもびんたを喰わされた。日本中が狂気に陥っていた時代であり、他校でもやはりこのような場合は、当然同じ仕打ちを受けたであろうと考える。印象に残ったのは、打たれたのを見たのがショックだったからではなく、私の隣の学友が思わず、『馬鹿だな！』と呟いて舌打ちしたほど、Mの余りにも馬鹿正直な発言に驚嘆したからである」(三七)というものである。他の回想によれば、サイパン陥落の時の配属将校からの質問であった。教練の授業時間は一九四二年の学科課程の改訂の時に時間数が増やされて毎週二時間となっていたが、その内容は、「隊列の組み方、銃の取り扱い。行軍、匍匐前進、突撃等々」(一〇)であり、宿泊しての富士の裾野の野外演習などがこれに加わった。それらの訓練には軍隊さながらの厳しさが求められ、学生たちは「よくしごかれた」(五三)のである。「一人の軍事教官は対象が高専生であったのを考えると厳し過ぎた」(八〇)と評する向きもあった。

その教練を指導するのは配属将校で、回答者の口からしばしば登場するのがO大尉である。このO大尉には、ふたつの評価がある。「士官学校出の予備役の大尉が居ったが、これが病氣退役にならなければ、今頃は将官であり友人は皆そうなっていると、大変に威張って、大変しぼられた。

特に小生はにやにやして居ると云って度々（口を少し動かすのでそう見えるらしい）サーベルで頭を叩かれ目玉が飛び出す程物凄く痛かった」（九八）とか「非人間的な〇大尉の軍事教練には、今なお強い嫌悪と反発を覚える」（五一）という批判する声であり、一方「〇というこの教官は、むしろ普断は物分かりの良い方だったといえる人であった」（三七）、「軍人でも上位の人は一般常識のある人だと思った」（五七）、「〇教官の訓練は、気持ちよく受け入れられた」（二二）という弁護する声もある。これらは体罰その他、自分と配属将校との具体的な場面から評価が下されている。

このような学校経営の基本方針を敷いたのは、前年に就任した岡野鑑記校長であった。一九四三年一月一日、田尻校長から岡野校長への送迎式が挙行された。岡野校長は、横浜高等商業学校創立以来の教授で、生徒主事も務めていた。一九三九年に関東軍の経済顧問になり、かつ建国大学教授を兼ねるために、転任した人物であった。他に校長の候補がなかったわけではないが、高齢と思想傾向からかなわず、岡野に白羽の矢が立ったのである。田尻校長に三顧の礼を尽くされ「戦士が、敗戦のせまった苦難の戦場にとびこんできたような悲痛な心境」で横浜に戻ってきたという⁽⁹⁹⁾。しかし学校の軍国主義的なイメージにまつわって、岡野校長と重ねて記されている回想が特に多い。それだけ

に、生徒の側からしても極めて印象深い人物なのである。

まず「就任の挨拶で『私は天皇陛下の命令をうけて本校へきた』という旨の発言には驚かされました」（六一）から岡野校長の印象は始まっている。「口髭を生やしていたことと国民服乙型の服で終始常に直立不動の姿勢で話をする軍人調の人」（五三）であった。生徒の立場から見ても、「五族協和の旗印の下、相当な皇道史観の信奉者で」（六二）、「右翼流の学校改革に情熱を燃やして」（九八）、学校を「理論的にリードし」（三六）ていた「特異な存在」（二八）「神がかり的な人」（五二）であった。

岡野校長自身も修身の授業を受け持っていた。その授業は、「昭和維新論」（二七）や「大東亜共栄圏のこと」（二四）であり、「関東軍の戦略による満州国の独立その後日華事変第二次世界大戦へと発展していった神がかり的軍国主義思想」（二〇〇）であった。なかでも「頭山満、石原莞爾等の話」（二五）、特に「石原莞爾の世界最終戦論」（四〇）に傾倒していたという。「国民の団結と本土決戦をして最期まで戦ふ事」（八九）や「満州の五族協和、神国日本を強調」（六五）した内容が多かった。「精神訓話が多く辟易しました。面従腹背の態度が外に出たのか、校長室へ呼ばれて説教を受けたこともありました」（五二）という学生にとっては退屈な授業であり、「同校長から再三『世界大戦はトナメント方式になるが、神国日本は必ず

最後に勝ち残るから徹底して戦わねばならない』という話や、『最後には日本に神風が吹く』といった話を聞かされた時、実感し、そう信じました」(六〇)という学生にとっては、緊張感あふれる授業であつたろう。「岡野校長が東亜連盟の役員」(二五)であることは、しばしば記述に登場してくることで、そのことを「むしろ反東條的と云ういみで理想主義教育に走ったのではないか」(八四)とする好意的な見方も示されている。

その好意的な評価は、学校内の体育館を学校工場に代えた点にも寄せられている。「当時として唯学問と戦争への協力を併立させようとしたことは、偉かったと思う。そのために体育館を軍需品製造の協力工場にした。工場勤務中の合間に授業もあったが、なかなか勉強しなかった」(三)、「戦時中と言えども学生の本分は学問をすることにあるとして、軍需工場への動員による勉強する機会の少なくなることを中心として、校庭の体育館を工場に改造して半日勉強し、半分工場で働く様にしてくれた」(二一)、「岡野校長が産軍制度を提唱して二学期から午前中授業、午後は学校工場で仕事をする事となった。(東芝の電探工場の一部を学校の体育館に作って実際に電探(レーダー)の一貫生産を始めた)」(五六)という学校工場の計画は、学生たちには好評裡に迎えられていた。岡野校長の指導のもとに「各地の軍需工場に分散動員されている学生を母校に集め、教官

と学生、あるいは学生同士のコミュニケーションが緊密に保てるようにするとともに、作業のあい間にはできるだけ授業をうけさせたいという、学校当局のねがいがこめられていた」という^⑤。

このような戦時期末期の学校生活の軍国主義的な教育実態に、学生たちは当時どのような評価をしていたのだろうか。「偶々岡野校長の個人的な考えが全体主義的であつただけで、校風、教育が軍国主義的であつたとは思われない」(八〇)、「岡野校長一人が軍国主義教育者で他はそんなでもなかった」(九一)、「軍国主義的な意識はあまり感じなかった。但し岡野校長がやや八紘一宇的な思想をもっていた様の感がある」(九七)と、校長の岡野鑑記については、先にみたように、学校経営の方針に軍国主義的なものを感じているが、しかしその他の場面では事態をそのままに受け入れ、さらに自由さをも指摘しているのである。

たとえば「軍国主義が徹底していたとは思わない」(二一)、「それ程徹底していたとは思われませんでした」(二四)、「我々学生はさ程徹底していたとは思わなかった」(八六)、という感想が続き、「全然実感したことありません」(三九)、「欠片も感じられなかった」(九四)という評価もあった。たしかに「一番の重点は『赤』、マルクス主義の生徒には、時々軍からマークされている者が、つかまつた話を聞いた」(五七)けれども、だからといって「軍国

主義と云つても、一般生徒には、それ程感じられなかった」(五七)。せいぜい「中学時代の延長」(五)であつた。

たとえば、厳しく「仲々さばれなかった」(三四)教練についても、そのままに受け入れている記述の方が圧倒的に多い。「〇教官の教練も旧制中学より楽であつた」(六五)「上海市での日本商業学校でもより以上の軍事教練があつた」(七九)と出身中学校との比較で語られたり、訓練も「それ程苦しいとは感じなかった」(一〇)という学生もいた。「軍国主義教育が徹底していたとの認識は全くなかつた」(中略)教えられる科目は完全にマスターしようとの意慾に燃えていたので、懸命に軍事教練に勵んだ。しかしそれが軍国主義教育だとの意識はなかつた」(一)のである。「国の自衛上、誠に止むを得ないもの」(中略)軍国主義教育、之は当然であつて、特に片寄っているとは考へてない。(中略)戦時中の学校教育として、何処も同じ」(七九)であり、「戦時下止むを得ないこと」(八〇)として受けとめられていたのである。

また岡野鑑記校長についても、「右翼的であつたが、當時の世相からしてごく自然に受け入れられた」(二二)、「戦時下の学校教育、社会風潮から違和感を感じなかった」(六二)、「私は軍国少年だったので先生を崇拜していた」(四〇)と批判的には捉えられておらず、「田尻先生としては岡野先生なら当時強まりつつあつた軍国主義教育を阻止

できると考えられたにも拘わらず、意に反した結果となられたと考えます」(一〇三)と岡野校長に軍国主義の防波堤としての役割期待があつたことが語られている。

さらに、比較的自由であつたという記述も多くあることに注目したい。「むしろ自由主義的な雰囲気が残っていたと感じている」(五四)、「学園内は自由でのびのびしていたと思う」(八四)「教授の殆どは自由主義的教育をうけられた人々であり、教授と文学を論じたり、クラシックレコード鑑賞会を開いたこともあります」(八七)といった例があるのである。

このように、軍国主義的な教育を予想以上に実感してないのである。この実感は半数近くの間答者をもつ印象であつた。これにはいくつかの要因があるように思われる。

ひとつは、小学校から中等教育を通じてすでに「軍国主義教育で育つた私たちには、入学当初より何んらの抵抗もなく過ごすことができた」(四六)という、精神的なレディネスが用意されていたことが大きな要因であろう。さらに中等学校での経験と比較して、「広島一中で二年半過した経験と比較すると、横浜工経のそれは全く問題にならない。何故なら広島一中の教育は江田島の海兵をまねていたから」(二八)、「中学時代新京一中は校長が陸軍中將であつた為、関東軍の兵隊と一緒に演習や教練を共にしていたので、横浜へ来てからはむしろ自由な気風にホットした」(八一)、

「旧制中学が厳しく軍事教練を行っている処でありましたので、当校に於ては其れ程軍国主義的な想ひは有りませんでした」(八九)、「工業学校(県立工業出身―引用者注)に比べ、全然のんびりして自由なのに驚いた」(九四)というように、専門学校に入学してそれまでの中等学校の軍国主義教育から、幾分でも解放されたという印象を持っていることである。

第二に、やはり横浜という地の持つ特性である。宇都宮出身の学生が「横浜はむしろ他地域より比較的自由で、学習も書籍もさして不便はなかった」(七三)としている。また「昭和一六、一七年頃は、むしろ、文明開化の先進地らしい自由で拘束のない学校だった。ついでながら横浜高商でもっと自由だったらしい」(一〇一)というように、文化的開明の地、横浜という舞台にある学校であったことは、専門学校生徒にとっては、窮乏する戦時下であっても相対的に恵まれた条件であったのである。

第三に、横浜高等商業学校時代から継承されてきた、いわゆる伝統である。「田尻常雄校長が卒業後はどこにでも適応できる豊かな教養と十分な智識を身につけたビジネスマンの養成を心がけられました。その根柢には良い意味での個人尊重と自由があった」(一〇三)と前校長の教育方針が繰り返し語られ、「教授、助教授の先生方は皆りベラるな考え方であったと思うが戦時の思想統制によって、表

面に出せなかったと理解される」(六五)と解釈されている。たしかに先にみた教師群像も、その学問的、人間的な影響力は、時代を越えていた。それゆえに敗戦後は「編入学した昭和二〇年九月(或は一〇月一日か?)頃は『横浜経済専門学校』と呼称されていたように思われる。入学後のカリキュラムは戦前の高等商業学校に類似した内容であった」(四三)と、すぐに高等商業に戻り得たのである。ちなみに、横浜工業経営専門学校は一九四六年三月に廃止され、横浜経済専門学校に統合されている。生徒たちの呼び方の方が先に、工業経営専門学校を廃止していたことになる。

逆に考えれば、それだからこそ皇国民の錬成に基づいた教学刷新を図らなければならかったのである。しかし工業経営専門学校への強権的な転換をはかった文部省の思惑は貫徹されずに終わっていた。青少年学徒の日常は、迫りくる「死」を想定して自分自身を確かめなければならぬ哲学世界と、軍国主義を当然のこととして受けとめつつ「空腹には耐えながら、学校塾の蟲の芋を喰い、明るく青春の日々を過ごしていた」(一〇)「生」の現実世界との往復のなかに成り立っていたのである。

(50) 前掲『輝く白亜』二五一頁。

(51) 前掲『輝く白亜』二五五―六頁。

(まえだ かずお 編集委員)

[表3] 学科課程とその変遷

1932年		1940年		1942年	
修 体 身 育	[1~3] [1~3] [5.6]	修 体 身 育及教練	[1~3] [1~3] [9]	修 体 身 操 練	[1~3] [1~3] [3] [3] [6]
国語作文書法	[1] [中2.5 商3]	国語及商業文	[1] [20]	国語及漢文	[1] [2] [8]
英語	[1~3] [中22]	英語	[1~3] [2]	第一外国語	[1~3] [2]
其ノ他ノ外国語	[1~3] [7.5]	第二外国語	[1~3] [2]	第二外国語	[1~3] [7]
数学	[1] [商2.5]	数学及珠算	[1~3] [2]	数学及物理化学	[1] [7]
高等数学	[1~2] [1]				[1]
商業数学	[1~2] [中2.5 商1]			商業数学	[1] [2]
珠算	[1] [中1]			珠算及商業文	[1] [1]
理化学	[1] [商2]	理化学	[1] [商2]		
工学	[1.5]	工学及商品	[1~2] [4]		
近世史	[1] [2]	法学通論及憲法	[1] [2]	国史	[1] [1]
法学通論	[1] [3]	民法	[1~2] [3]	法学通論憲法	[1] [2]
民法	[1~2] [3]	商法及商事關係法	[2~3] [3]	民法	[2] [3]
商法	[2~3] [3]			民法	[3] [3]
商事關係法	[3] [1]				
國際法	[3] [1]				
憲法	[3] [1]				
經濟學原論	[1~2] [3]	經濟原論	[1] [2.5]	經濟原論	[1] [3]
景氣論	[3] [1]	經濟政策	[3] [2]	經濟政策	[2~3] [2]
經濟學史	[3] [1]	日本經濟	[3] [1]	日本產業論	[3] [1]
商業政策	[3] [2]	經濟史	[3] [2]	經濟史	[3] [2]
商業史	[2] [2]	經濟地理及外國經濟事情	[2~3] [3.5]	經濟地理	[1] [2]
商業地理	[2] [2]				

- 注1) 1932年度の出典は、文部大臣田中隆三宛「規則中改正ノ件上申」横浜高等商業学校長田尻常雄（1931年12月7日）による。学科課程表は、第1学年から第3学年まで、第1学期と第2学期とに区分されて毎週教授時数が示されているが、ここでは学年ごとに毎週教授時数を割り出し、それを合算して「中・商」と区別のあるのは、出身によって教授時数が違ふことを示している。各科目の後の〔 〕には、その科目の履修年次が示されている。また、必修科目のほかに選択科目があり、後者はひとまず下げて表示し、時間数も（ ）内に示した。各学年の総教授時数は、第1学年から第3学年まで34時間で、第3学年のみ必修25～26時間に選択8～9時間となっている。
- 注2) 1940年度の出典は、文部大臣河原田稔吉宛「規則中改正ノ件上申」横浜高等商業学校長田尻常雄（1939年12月1日）による。学科課程表の作成の仕方は、注1) に同じである。各学年の総教授時数は、第1学年から第3学年とも32時間である。科目の並べ方は、1932年度の科目に対応するように若干並べ換えた科目もある。
- 注3) 1942年度の出典は、文部大臣橋田邦彦宛「本校規則改正ノ件認可申請」横浜高等商業学校長田尻常雄（1941年12月5日）による。学科課程表は、第1学年から第3学年まで、1学年ごとに毎週教授時数が示されており、3学年を合算して「〔 〕」に表示した。各学年の総教授時数は、第1学年から第3学年とも31時間で、別に「特別講義」が配置されている。科目の並べ方は、1932年度および1940年度の科目に対応するように若干並べ換えた科目もある。
- 注4) 1942年度の「特殊学科目」は、商業分科、貿易分科、経営分科の3つに分かれたれ、各分科に属する学科目から学校長が指定した学科目を、毎週5時間履修することになっていた。それぞれ商業分科には、配給論・会計監査・金融各論・保険各論・交通各論・景気論・景気論・商業実践（各一）が、貿易分科には、国際金融・保険各論・世界経済論・植民論・国際法・貿易実践（各一）が、そして経営分科には、工業経営論・組合論・会計監査・原価計算・経営分析・社会政策・景気論・工業各論（各一）の科目が置かれていた。
- 注5) 1932年度の「其ノ他ノ外国語」は、支那語、独逸語、仏蘭西語、西班牙語、和蘭語のなかから1つを選択、1940年度の「第2外国語」は支那語、西班牙語、仏蘭西語、露西亜語、和蘭語および馬來語のなかから1つを選択することになっていた。1943年度は「第一外国語」が、英語で、「第二外国語」は、支那語、西班牙語、独逸語および仏蘭西語のなかから1つを選択することになっていた。
- 注6) いずれも『大正十三年一月 横浜経済専門学校 高松経済専門学校』（第九～一〇冊）による（国立公文書館所蔵）。